

定義と質料

——アリストテレス『形而上学』における $\sigma\mu\acute{o}\nu$ (獅子鼻) 問題をめぐって——

浜 岡 剛

1 問題

アリストテレスは、『形而上学』Z巻において、(質料抜き)の形相を実体とする方向で議論を進めている、と一般に考えられている⁽¹⁾。しかし、ある箇所では、形相を質料抜きで考えるということそれ自体、ある場合には成り立ちえない、あるいは、ある場合にはその形相の定義が必然的に質料への言及を含まざるをえない、と彼は考えているようにも見える。D.M.Balme⁽²⁾ はそのことを重要な根拠の一つとして、アリストテレスの実体論を本質主義とすることはできない、と主張している。果たしてアリストテレスは(実体である形相)の定義のうちに質料が含まれることがあると考えていたのかどうか、この正否を確認することが本論文の意図するところである。

アリストテレスによれば、事物を定義する場合に定義が本来関わるのは、その事物の形相である。ところが、それではうまく事物の何たるかを明らかにすることができないものがあり、そのアポリアを説明するために、シーモン ($\sigma\mu\acute{o}\nu$, 獅子鼻)⁽³⁾ が例として持ち出される。

「(自然学の対象の)本質 ($\tau\acute{o}\ \tau\acute{i}\ \eta\nu\ \epsilon\acute{\iota}\nu\alpha\iota$) とロゴス (定義) がどのようなあり方をしているか見失ってはならない。というのは、この確認なしでは、探求が無益な行ないになるからである。定義されるものないしその『何であるか』($\tau\acute{\alpha}\ \tau\acute{i}\ \epsilon\acute{o}\tau\iota$) のうちの或るものはシーモンのようなものであり、或るものは凹みのようなものである。それらは次のような点で異なっている。すなわち、シーモン (獅子鼻) は質料と一緒に結びついているものであるが (なぜなら、シーモンは凹んだ鼻であるからである)、凹みは可感的質料抜きのものなのである。すべて自然物——たとえば、鼻や眼や顔や肉や骨や一般に動物、あるいは、葉や根や樹皮や一般に植物——が、シーモン

と同様の仕方では語られるならば（それらのいずれについても、その定義は動を抜きにしてはありえず、つねに質料を含んでいる）、自然物の場合にどのように『何であるか』を探求し定義しなければならないのか、なぜいくつもの魂について——それが質料抜きにはありえぬ限りにおいて——考察するのが自然学に属するのか、ということとは明らかである」（E1, 1025b28–1026a6）。

シーモン（獅子鼻）というのは、「凹んだ鼻（κοιλῆ ρίς）」のことである。それを形相—質料という対概念で分析しようとするならば、形相が「凹み（κοιλότης）」で質料が「鼻」ということになるであろう。ところが、シーモンがあくまである種類の鼻であるのに対して、「凹み」というものは形の一種類にすぎず、鼻以外のものについても適用される。このような、シーモンの何たるかを十分には示していない「凹み」は、シーモンの定義とはなりえない。シーモンの定義はあくまで「凹んだ鼻」でなければならない。つまり、その定義は質料への言及を含まざるをえない。しかし、アリストテレスによれば、「定義は普遍と形相に関わる」（Z 11, 1036a28–29）のであり、「実体（本質）のロゴス（説明、定義）のうちには質料という意味での部分は含まれない」（Z 11, 1037a 24–25）のである。してみると、シーモンを適切に定義することはできない、ということになりそうである。

もちろん、事物の定義の中に質料が含まれないといっても、そこで言う定義とは、実体論の文脈で言われる、対象を他のものとの関係を抜きにして規定する（つまり実体についてのみ妥当するような）定義のことであるから、広義の定義を考えれば、シーモンの定義に質料である鼻が加わっていても別にかまわない（Cf. Z 5, 1030b26–28）。けれども、先の引用で問題となっているのは、単にシーモンという特殊例のことではなく、自然物、特に生物に関してのことである。生物はアリストテレスが実体として最も重要視しているものである。アリストテレスはZ巻第10、11章において、定義の中に事物の質料的部分が含まれるかどうかを検討しており、多くの解釈者は、ある事物、たとえば生物のようなもの場合には、形相あるいは定義の中にある種の質料が含まれるということがそこで主張されている、と解釈している。したがって、その箇所の解釈が、本論文の中心を占めることになる。

2 シーモンと結合体

定義と質料の関係に関するZ巻第10、11章の議論を考察する前に、そもそもシーモ

ンという例がどのような意図で持ち出されているかを確認しておく必要がある。

先の引用でアリストテレスがシーモンを持ち出したのは、自然学の対象が、質料とは独立に存在するものではないこと、アリストテレスの用語を用いるならば、「(形相と質料との) 結合体(σύνολον)」（以下単に「結合体」と呼ぶことにする）であることを強調するためである。この地上に存在するものはすべて、質料なしには存在し得ない。そして、自然学はそのような自然物を、数学のように質料を捨象した形で事物を考察するのではない。つまり、アリストテレスに言わせれば、主な初期自然哲学者たちは質料ばかりを考察していたし、またピュタゴラスやプラトンのように、質料を無視して事物の形相的側面だけに着目するもの、本来の自然学の研究態度ではない。したがって、自然学を探求する者は、形相と質料の両側面を考察の対象としなければならない、というのである。同様の指摘は先の箇所以外に、『自然学』第2巻第2章などにも見られる(194a6)。また、自然学に直接言及することはなくとも、単なる形相だけを考える場合とは区別された、具体的な事物としての結合体を示すためにシーモンに言及することがある(Z 10, 1035a26; Z 11, 1037a31; K 7, 1064a22; *De Anima*, III 4, 429b14; III 7, 431b13)。

もちろん、シーモンはアリストテレスが実体論で実体の資格を問題としているような「結合体」とは異なる。シーモンはあくまで鼻の自体的な属性⁽⁴⁾であり、「結合的実体(σύνολος οὐσία)」（Z 11, 1037a30)の具体例ではない。この点はきちんと押さえておかなければならない。ただ、自然物体を結合体の例として挙げようとする、たとえば「人」という語の場合だと、それは結合体(つまり個々の人間)を指し示しているのかもしれないし、人の形相を指し示めているかもしれず(Cf. Z 11, 1037a 7-8; Z 10, 1035b1-3)、どちらを指しているのか曖昧である。このような二義性から生ずる混乱を避けるために、結合的実体とは言えないものの、形相と質料の両方の要素が入っていることが明らかなシーモンが、説明のために取り上げられたのである。つまり、シーモンが持ち出されるのは、結合的実体の具体例としてではなく、あくまで理解のためのアナロジーとしてなのである。したがって、シーモンにあてはまるものがそのまま結合体に当てはまると考えるのは早計というものである。実際アリストテレスは、結合体の説明の際に、便宜的に「凹み」をシーモンの形相として扱ったりもしている(Z 11, 1037a29-32)。

事実、Z巻第5章では、シーモンが、自体的な属性の例として取り上げられてい

る。そこでは、「単純ではなく、結びついてできたもの」の定義が問題とされている。Z巻第4章においてアリストテレスは、実体の候補として本質を取り上げ、付帯的な属性のように、それが属する実体との関係抜きには説明できないものとは区別されて、「それ自体において語られるもの」が実体の資格を持っていることを指摘する。そのような議論の延長線上に、自体的な属性を取り上げ、シーモンのように、それが属しているものに言及することなしにはそれを説明することができないようなものについては、狭義の定義、つまり、対象を他のものとの関係抜きにそれ自体として規定する（具体的には類と種差だけで対象を規定するような）定義が成り立たないことを示す。そして、そのような定義は実体についてのみ成立する、と結論づけている。

もちろん、結合体が実体であるかどうかについては、そこではまだ検討されていない。ここで述べられているのは、次のようなことである。すなわち、シーモンという語は形容詞的に用いることができ、σμή ρίς という表現に基づいて、それを定義しようとする、σμός という語はそれだけで「獅子鼻の」という意味になり、すでに「鼻」が含意されている。それゆえ、σμή ρίς を言い換えようとする「凹んだ鼻の鼻(ῥίς ῥίς κοίλη)」(1030b33-34) というように、二度「鼻」という語を繰り返さなければならなくなる、といった不都合な事態が帰結する。このようなことがここで議論されており、この点を考えるならば、そのようなものを実体とみなすことはできない。もちろん、ここでは「結合的実体」のことを問題としているのではなく、このような事態は具体的な「人」といった結合体についてそのまま当てはまるものではないであろう。シーモンと結合体との類似性から、結合体もまた（第一義的な）実体ではない、という結論が予想されるが、結合体に関する結論は第10、11章までもちこさされている。

3 可感的質料と定義

Z巻10章においてアリストテレスは、定義に含まれる事物の部分を問題とする。そこで問題とされている定義というのは、きわめて限定された意味での、実体のみを対象とするような定義である。つまり、（たとえば、白を定義する場合には、物の表面に言及せざるをえないように）定義されるものとは別のものに言及しなければならぬようなものの場合とは異なる、狭義の定義である。つまり純粹に類と種差によって構成されるような定義である。そのような定義に関して、事物のどのような部分が定

義の中にその部分として含まれ、どのような部分が定義の中に含まれないか、という問題を考察している。たとえば、円の定義には、円の部分である弧の定義は含まれないが、シラブルの定義には、字母の定義が含まれる。その違いは何に由来するのか。この問題に対する答えは結局、定義の対象となるのは形相だけであり、事物の質料的部分は定義の中には含まれない、というものである。そしてさらにそのことから、「結合体」についても、それが可感的なものであれ可知的なものであれ、定義は成り立たないということになる (Z 10, 1036a2—5)。

そのような議論を受けて、Z 巻第11章では、「どのようなものが形相の部分であり、どのようなものが、そうではなくて、[質料と] 結びついているものの部分であるのか」(1036a26—27) という問いが立てられる。種類の異なる質料において現れるような形相の場合、たとえば円のような場合には、質料を取り去って形相だけを見て取ることは容易である。青銅や石などにおいて共通に現れる円の特徴を考えてみればよいのである。それに対して、現実には特定の質料においてしか現れないようなものは質料を取り去って考えることは困難である。たとえば、人の場合がそうであり、人の形相は肉や骨においてのみ現れ、思考によって質料を取り去るのも難しい。1036b3—7 では、骨や肉が人間の形相に含まれるのか、それとも質料であるのか、ということに関して断定的に語ってはいないが、すぐ直後で、ピュタゴラス派が数学的对象の定義に関して、線や連続体を取り去って考え、すべてを数に還元していることを指摘する際、取り去られる線や連続体が人の骨や肉にたとえられていることから、骨や肉はやはり形相の中に含まれない、と考えていると解するべきであろう。

しかし、1036b21 以下の議論では、ある種の質料は形相あるいは定義の中に含まれる場合があり得ることを示唆しているように見え、事実そのように解する者も多い。

「それゆえ、すべてのものをそのように⁽⁵⁾還元して、質料を取り去るのは余計なことである。というのも、おそらくあるものどもは、『これこれのうちのこれこれ』(τόδ' ἐν τῶδ') あるいは、『これこれの状態にあるこれこれ』(ὡδὶ ταῦτ' ἔχοντα) であるからである」(1036b22—24)。このようにアリストテレスは語り、若い方のソクラテス⁽⁶⁾ (以下「ソクラテス」) による動物と「円と」の比較は適切ではない、と言う。彼の考え方は、「円が青銅なしにあるように、人間もその諸部分なしにありうるように思わせてしまう。しかし、それらは同様のあり方をしていないものではない。というのも、動物はある可感的なものであり、動なしには定義できず、したがって、ある状

態にある部分なしには定義できない」(1036b26-30)。そして、「定義は普遍と形相に
関するものである」(1036a28-29) から、動物の定義に欠かせない手とか足といった
身体の諸部分は、当然動物の形相の中に含まれる、と推論されることになる。この箇
所についてたとえば Balme⁽⁷⁾ は、円の場合には形相をその質料、たとえば青銅や石な
どから切り離して考えられるけれども、人の場合にはそれが不可能である、という
シーモンにおけるような状況にある、と説明する。また、T. H. Irwin⁽⁸⁾ は、「質料が生
きている生物体の形相、本質の部分である」ということをここでアリストテレスは考
えていると言う。

1036a34-b7 で肉や骨といったいわゆる「同質的部分」が人の形相の部分であるこ
とが否定されているとしても、この箇所の問題となっているのは、「手」の例から分
かるように、いわゆる「非同質的部分」つまり、同質的部分の結合からできあがっ
ている、より人というあり方に近い質料、つまり近接質料が問題となっており、近接質
料の場合には、それは事物の形相、本質の中に含まれることがここで指摘されてい
るのだ、と解釈することもできる。あるいは、すぐ後で、人の部分であるといえるの
は、その働きを果たすことができる手、つまり魂を有する手である、とされているこ
とから、身体が魂を失うと名前の上だけの身体にすぎないということが強調されてい
る『デ・アニマ』第2巻第1章と結びつけて、特に生物の場合にこのような事態が帰
結するのである、と解する可能性もあろう。

M. Frede/G. Patzig⁽⁹⁾ はこのような解釈に反対している。アリストテレスはZ巻で
は、定義が対象とするのは形相だけであり、質料も対象とするわけではない、という
見解を採用している。したがって、アリストテレスはソクラテスの考えを否定してい
るわけではなく、ただ、自然的対象がそれに固有な質料なしに存在しうるかのような
誤解をまねきかねない、ということを目指しているにすぎない。定義の中でこの質料
に言及しなければならぬ、ということのアリストテレスはここでも、また先の
1036b7 でも主張してはいない。動物のようなものを定義する場合には、それはその
質料に顧慮したものでなければならぬが、質料に定義の中で言及する必要はない。
このように彼らは主張する。

1036b24ff. を解釈する上で注目すべきなのは、M. L. Gill⁽¹⁰⁾ が指摘しているように、
1036b3 では明確に「人の形相」と言われていたのに対し、ここでは単に「人間」
「動物」としか言われておらず、しかもそれが「可感的 (αἰσθητόν)」(1036b28) と言

われている点である。つまり、1036b3ff. では人の形相が問題になっていたのに対して、ここでは具体的な人、つまり結合体としての人が問題になっており、ソクラテスがそれを円の場合と同様に扱っていることが問題であるとされている、というわけである。Asclepios⁽⁴⁾ が指摘しているように、円は数学的对象であるが、動物は可感的対象であるということがここでポイントになるであろう。ここで主張されているのは決して、特に生物の場合にはその質料である手とか足とかいった器官的部分がその定義の中に含まれる、ということではない。可感的事物である自然物一般について、それは質料抜きではありえないということが主張されているのである。

アリストテレスによれば、数学的对象もまた可感的なものの属性として存在する。しかし、数学者はそれを可感的なものとして考察するのではなく、たとえば円として、線としてというように、質料とは独立のものとして考察するのである。このように数学者が、数学的对象をそれが紙の上に現れているとか、ある可感的事物において現れているとかいったことを無視して、それ自身独立なものとして考察するように、自然物を考察する場合にも同じように扱うべきだ、あるいは扱うことができる、というのが、ソクラテスが行なった動物と円との比較であろう。もちろん数学的对象と可感的対象とは異なり、可感的事物は質料抜きでは考えられない。先に述べたように、自然物を自然物として考察する自然学者は、形相と質料の両面から対象を捉えなければならない。ソクラテスのような見方は、形相と質料とを明確に区別しようとする場合に陥りやすい誤りであり、アリストテレスはそれに注意を促しているのであろう。しかし、だからといって、可感的事物の形相の中に質料が含まれている、ということにはならない。この点は、当該箇所が続いて述べられている、数学的对象に関する議論と関連づけて見ることで、より明確に理解することができる。

4、可知的質料と定義

1036a32-1037a5 は、その前後で「人」などの可感的事物のことが論じられているので、ここで数学的对象について述べられているのは文脈上不自然であるように見える。そのため、後からの挿入ではないかとも考えられたりしたが、現代の書物ならば、注として別に扱われるものが、本文中に入ってきたようなものであって、ここに置かれていることには意味がある。円の場合には動物と違って質料抜きで考えることができる、ということが先に問題となったソクラテスの比較につながったのである

が、円のような数学的対象の場合には別の意味での質料的部分が考えられ、すでに10章では、たとえば円の場合に、半円といったものはその質料的部分として、円の定義には含まれないことが指摘されていた。このような質料について、(結合体としての)動物や人の場合のいわゆる可感的質料と同じように、円の定義に含まれると考える必要はないのだろうか、という疑問が当然生じてくるであろう。そこで、それがどういう意味で主張されたのかについて一言述べておく必要を感じ、人の場合も、円の場合も、その質料の種類は異なるけれども、その形相の中には質料が含まれず、質料が含まれるのは個別的なもの(τὰ καθ' ἑκάστη)の場合であることを指摘しておくために、Z巻第10章での問題をもう一度取り上げたのである。

半円がどういう意味で質料的であると言われるのか、アリストテレスは明確には語っていないが、「それらは普遍的な円の質料ではなく、個別的な円の部分であることになろう」(1037a2-4)と言う。一見したところ、ここで言う「個別的な円」というのは、青銅や石において現れている具体的な円であって、半円はそのような円の部分として存在していることを指摘しているかのように解されるかもしれない。けれども、ここでは半円にしる円にして、可感的なものではないことが明言されているのだから、青銅の円における部分といったものを想定するのは適当ではない。もちろん紙の上に画かれた円のように可感的な形で考えてもよいのだが、ここで問題とされているのは、円というものを具体的にイメージして考えるような場合に、半円というものがその部分として見えてくる、ということであろう。それは「思惟あるいは感覚とともに認識され、思惟や感覚が現実態でなくなると、あるのかないのかはつきりしない」(1036a5-7)と言われるような円である。感覚がなくなると存在が確認できないのは、青銅製の円のようなものの場合であり、思惟がなくなるとはつきりなくなるのは、形相としての円ではなく、いわゆる可知的質料をともなった結合体としての円の場合である。我々が「円」といういうことで具体的に思い浮かべる円である。我々は円を思い浮かべるとき、たとえば「中心からの距離が等しいもの」(*Analytica Posteriora* II 7, 92b22) などという形で思い浮かべるのではなく、ある一定の大きさを持った円を思い浮かべる⁴⁹。アリストテレスが「個別的な(καθ' ἑκάστη)円」といっているのは、そのような円のことであろう。その場合には、円の形相だけではなく、可知的質料も一緒に考えられているのである。そのような円は、思惟している間だけのものであり、個別的なものとして、可感的事物の場合⁴⁹と同様に、それについて本来

の意味での定義はありえないと考えなければならない。

アリストテレスは、Z巻第6章において、実体が満たすべき基準として、そのものとそのものの本質とが同一であることを挙げている。というのも、実体は他のものとの関係においてではなく、「それ自体で語られるもの」(1031a28) であるので、そのものとそのものの本質とが異なっているなら、そのものは複合物であり、もはやそれ自体で一なるものとして語られるものではありえないことになってしまうからである。そのような条件を満たすものが形相なのであり、だからこそ第10, 11章において、定義の対象として形相を結合体から区別することが強調されるのである。可知的であれ、質料が加わっているものは「これこれ(M)のうちのこれこれ(F)」あるいは、「これこれの状態(F)にあるこれこれ(M)」という形で表現される(Z 11, 1036b23-24)。そのようなものはそれ自身のうちに、「MについてFが語られる」というような述語づけ関係で表現され得るような関係を含み、もはやそれ自体で一なるものとは言えない⁰⁴。その場合、そのものとその本質とは完全には一致しないであろうから、そのようなものは厳密な意味で実体とは言えない。質料を含んだものである限り、それは常に不確定な要素を含んでおり、ただその形相のゆえに(二次的に)定義しうると言えるにすぎない(Cf. Z 11, 1037a27-28)。それゆえ、可知的質料が形相の内に含まれると考えるのはアリストテレスの実体論の意図に反すると言わざるをえない。

確かに、Z巻第4-6章および10-11章のまとめと見られる第11章の1037a21以下では、「なぜ或るもの場合にはその本質のロゴスが定義されるものの部分を含み、或るもの場合には含まないのか、について……述べた」(1037a22-24)と言われており、London Group⁰⁵は、そこでは1036b24ff. で問題とされた人と円との対比について語られており、ある場合には定義において質料的部分に言及しなければならないことが指摘されているのだとする。けれども、すぐ後で、実体のロゴス(定義)には質料的部分が含まれない、とされているのは、形相と質料との結合体についてはロゴス(定義)が存在しないということを示唆しているように見える。これは、彼らの解釈によれば、アリストテレスが二種類の結合体的実体——1035b27-30で言われている普遍的なものとして捉えられた結合体と、個別的なものとしての結合体——を混同した結果であるということになる。しかし、上述の引用箇所で行われているのは、すでに偽Alexandros⁰⁶が指摘しているように、第10章で問題とされた、シラブルの定義の中に字母が含まれるような場合と考えるべきである。London Groupがそう解釈しなかつ

たのは、第10-11章での議論は、質料を定義の中に含ませようとする方向で進んでいるという先入見のためであろう。しかし、それらの章での議論での重要なポイントの一つは、形相と結合体を明確に区別することであり、それは第4-6章での議論ともつながるものである。したがって、どのようなものであれ、質料を(狭義の)定義の中に含めなければならないか、ということは実体論において特に問題とされてはいない、と解するべきであろう。

5 質料と形相

アリストテレスは『形而上学』Z巻の実体論において、実体と認定される可能性のあるものを順に検討し、最終的には形相ないし本質を第一の実体として認定しようとする方向で議論を進めている。第3章の冒頭では、本質と普遍と類と基体との四つがその候補として挙げられる。そして、第3章では、基体という観点からすると、質料がまず第一に実体ということになりそうだが、トデ・ティ(或るこれ)と離在という条件を満たさないゆえに、実体とは認められない。第4-7章では「本質」が取り上げられ、如何なるものに本質が属するかが検討され、属性、あるいは属性を伴った事物が実体から排除され、「それ自体で語られるもの」が実体であるとされる。第10-11章ではさらに、定義との関係で、形相を質料、結合体からきっぱりと区別し、それ自体として捉えようとしたのである。アリストテレスによれば、質料は「不確定なもの(ἀόριστον)」(1037a27)であるがゆえに、それを伴った結合体については(狭義の)ロゴス(定義)は成立しない。もちろん、ここで言う質料を、Ross¹⁰⁾のようにいわゆる「第一質料」に限定する必要はない。Θ巻第7章で説明されているように¹⁰⁾、ある事物が特定のものとして存在するのは形相ゆえにであり、形相があってはじめて、質料をそのものの質料として特定化することができる。したがって、実体論では、形相という概念をいわば純化することが重要な課題となっているのである。

そして、続く12章で、いわば形相の内部に見られる部分、つまり定義における類と種差の統一性の問題が取り上げられるのも、先の章で、形相がそれ自体で語られるものとして純粋な形で捉えられたことを受けてのことである。Balmeのように、シーモン問題が第10-11章での議論を通じて明らかになった、アリストテレスの実体論の根本に関わる重要なアポリアであるとするならば、この第12章の議論をZ巻の中で適切に位置づけることはできないであろう。

もちろん、結合体における形相—質料関係がどういふものであるか、ということとはそれ自体としては決して無視できない重要な問題である。特に形相と質料の両方を考察しなければならない自然学にとって、その問題はきわめて重要な問題となるだろう。けれども、アリストテレスは実体論において、ある種の質料は形相の内に含まれるなどという仕方で、形相と質料との区別を曖昧にするような主張はしておらず、むしろ形相を質料的なものから区別しようとする態度で一貫しており、それこそがZ巻第10—11章での重要な課題である。シーモン問題に対してアリストテレスは、Balmeの考えるようなアポリアを見いだしているわけではないのである。

註

引用箇所指定において特に書名を挙げてないものはすべて『形而上学』からの引用である。なお、『形而上学』の巻のみは、通例に従いギリシア文字で、E巻、Z巻などと表記した(数字で表記するならば、それぞれ第6巻、第7巻となる)。

- (1) 拙論「アリストテレスの実体論における〈トデ・ティ〉の意味」『関西哲学会紀要』第24冊、1990年、pp.28-33、「普遍、エイドス、個」『古代哲学研究室紀要』1号、1992年、pp.2-13参照。
- (2) D. M. Balme, “Aristotle’s biology was not essentialist,” A. Gotthelf & J. L. Lennox (eds.), *Philosophical Issues in Aristotle’s Biology*, Cambridge, 1987, pp.291-302 (esp. p.295). Cf. Balme, “Note on the aporia in *Metaphysics Z*,” *Ibid.* pp.302-306; “The snub,” *Ibid.* pp. 306-312; “Matter in the Definition,” D. Devereux & P. Pellegrin (eds.), *Biologie, Logique, et Métaphysique chez Aristote*, Paris, 1990, p.49-54.
- (3) 日本語では、シーモンは「獅子・鼻」という複合語になり、「鼻」が語の一部として明示されてしまい、アリストテレスが考えるアポリアがうまく表現されない。ので、訳さずに「シーモン」のまま用いる。なお、桑子敏雄氏は、日本語で対応するものとして、「えくぼ(凹んだ頬)」の場合を考えればよいことを指摘している(『エネルギー』東京大学出版会、1993、p.133)。
- (4) *Analytica Posteriora* I 4, 73a34ff. においてアリストテレスは、「自体的(καθ’ αὐτά)」の意味を四つに分類しているが、ここでの「自体的」は二番目に挙げられているものである(73a37-b5)。すなわち、AがBに属し、かつBがAの定義に属している場合に、AがBに自体的に属している、と言われる場合のそれであり、「何か別の基体について語られないもの」(73b5-6)という、実体論で問題とされる

それとは異なっている。

- (5) 1036b7-20 で問題とされている、「すべてを数に還元する」(1036b12) ようなやり方を指している。
- (6) この「若い方のソクラテス」というのは、プラトンの『政治家(ポリティコス)』で対話人物として登場する、プラトンの師であるソクラテスと同名の若者のことと考えられる。しかし、このソクラテスが具体的にどのような議論の中でここで問題とされているような比較を行ったかを確認することは、残念ながらできない。
- (7) Balme, "Aristotle's Biology was not essentialist," p.295.
- (8) T.H.Irwin, *Aristotle's First Principles*, Oxford, 1988, p.240. Cf. W.D.Ross, *Aristotle's Metaphysics*, vol. II, Oxford, 1924, p.205 (comment to 1036b27). 桑子敏雄『エネルギー』pp.134-135.
- (9) M.Frede / G.Patzig, *Aristoteles, Metaphysik Z'*, Bd. II., München, 1988, pp. 209-213. Cf. E.C. Halper, *One and Many in Aristotle's Metaphysics*, Columbus, 1989, pp.106-110, M. Frede, "The Definition of Sensible Substances in Met. Z," D. Devereux & P. Pellegrin (eds.), *Op. cit.*, pp.113-129.
- (10) M.L.Gill, *Aristotle on Substance*, Princeton, 1989, p.134, n.53.
- (11) Asclepius, *In Aristotelis Metaphysicorum Libros A-Z Commentaria*, ed. M.Hayduck, Berlin, 1888, p.420.
- (12) Cf. Aristoteles, *De Memoria*, 1. 449b30-450a7.
- (13) Cf. Z 15, 1039b20-1040a7.
- (14) Cf. Frede, *Ibid.* pp.123-236.
- (15) M. Burnyeat and others, *Notes on Book Zeta of Aristotle's Metaphysics*, Oxford, 1979, pp.97-98.
- (16) Alexandros Aphrodisias, *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*, ed. M.Hayduck, Berlin, 1891, p.516.
- (17) Ross, *Ibid.* p.205.
- (18) 拙論「アリストテレスの実体論における〈トデ・テイ〉の意味」p.31-32 参照。

(本論文は、文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である)

[哲学 日本学術振興会特別研究員]

Definition und Materie

— Zur $\sigma\mu\acute{o}\nu$ (das Stupsige)-Probleme in Metaphysik des Aristoteles —

Takeshi HAMAOKA

Aristoteles sagt in Metaphysik Z, daß die Definition im engeren Sinne nur die Form zum Gegenstand hat. Aber an einiger Stellen scheint er zu behaupten, daß eine Art von Form nicht definiert werden kann, ohne zugleich die ihr entsprechende Materie anzugeben, wie $\sigma\mu\acute{o}\nu$ (das Stupsige) ohne Naze nicht definiert werden kann. Daraufhin behaupten einige Interpreten, daß die Form eine Art von Materie einschließt. Der Verfasser versucht solche Interpretation zu kritisieren.

Aristoteles macht Gebrauch von $\sigma\mu\acute{o}\nu$ als Analogon des Konkreten (nicht als sein Paradigma), um zu betonen, das Konkrete sei notwendig das Vergebundene von Form und Materie. Dabei behaupt er nicht, daß wir bei dem Konkreten im Prinzip unfähig sind, seine Form von Materie in Gedanken zu trennen. Aristoteles sagt zwar in Z11,1036b21-32, daß der Mensch nicht ohne Teile (z.B. die Hände) definiert werden kann, aber dort handelt es nicht um die Form des Menschen, sondern um den Menschen als das Konkrete. Materie ist also nicht in der Definition im engeren Sinne eingeschlossen. In 1036b32-1037a5 deutet er darauf hin, daß das auch für die intelligibele Materie gilt.

Aristoteles versucht in Metaphysik Z10-11, die Form deutlich von dem Konkreten zu unterscheiden. Es ist also klar, daß er konsequent das Materielle aus der Form ausschließt.